

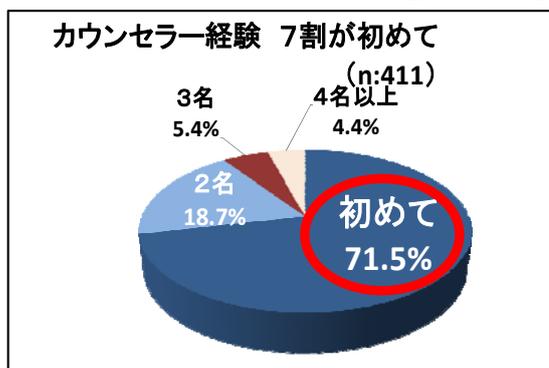
カウンセラーアンケート調査概要

- 1. 調査目的 米山奨学事業の特長であるカウンセラーの役割の向上、およびカウンセラー制度の充実を図ることを目的とする。調査結果は制度に反映させ、カウンセラー研修会資料として活用する。
- 2. 調査方法 インターネット調査（任意記名回答）
- 3. 調査時期 2011年6月
- 4. 調査対象 米山カウンセラー：614名(2011年3月終了奨学生のカウンセラー)
- 5. 回収数 411 / 614 （回収率 66.9%）
- 6. 回答者の属性 回答のあった411名の「カウンセラー経験」と「ロータリー会員歴」の内訳は下記グラフA・Bの通りである。解説では回答者全体の傾向とともにこうした属性による傾向の違いから分析を加えている。

7割が初めてのカウンセラー

【グラフA】

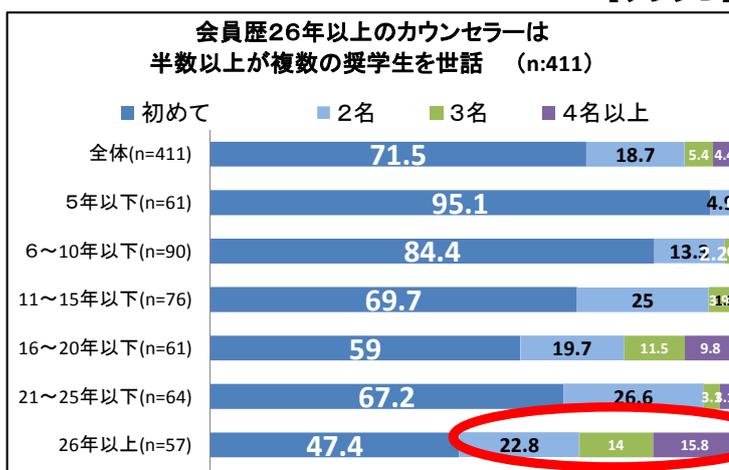
米山奨学生を「初めて世話する」が71.5%、「2名」18.7%、「3名」5.4%、「4名以上」が4.4%であった。全体の7割以上が、「初めてカウンセラーを体験」という結果であった。米山奨学生を身近に感じ、この事業の意義や醍醐味を実感できるのは「カウンセラー経験者」であるので、カウンセラーの裾野が広がる傾向にある事は望ましい。



ロータリー会員歴とカウンセラー経験

【グラフB】

会員歴別にカウンセラー経験を見ると、「会員歴5年以下」の場合、当然ながら、「初めて」が95.1%と多くを占める。会員歴が長くなるほど「初めて」カウンセラーをする率が低くなる。会員歴が26年以上（入会が1985年以前）の会員（57名）は、半数以上が複数の奨学生を世話している。世話クラブによっては、特定の会員に奨学生のお世話を任せているケースが見られる。ベテランカウンセラーの重要性と共に、新しいカウンセラーの起用を呼びかけていく必要がある。



カウンセラーアンケートの分析・解説

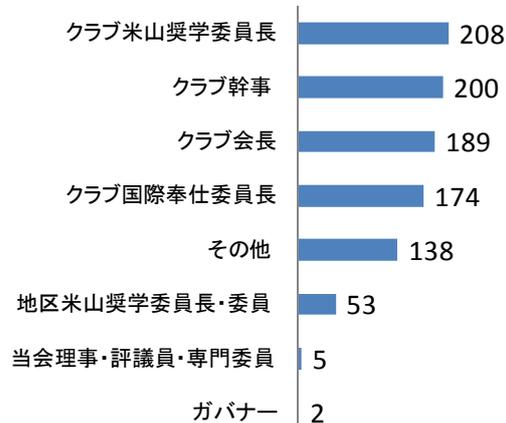
1. ロータリーで経験した役割（複数回答）

今までのロータリーで経験した役割について聞いた。

クラブ米山奨学委員長が208名とトップで、続いてクラブ幹事200名、クラブ会長189名、クラブ国際奉仕委員長174名と続く。

クラブ米山奨学委員長経験者の他、クラブ幹事やクラブ会長を経た会員が、カウンセラーになっている。

今まで経験した役割（複数回答）



2. カウンセラーになった理由

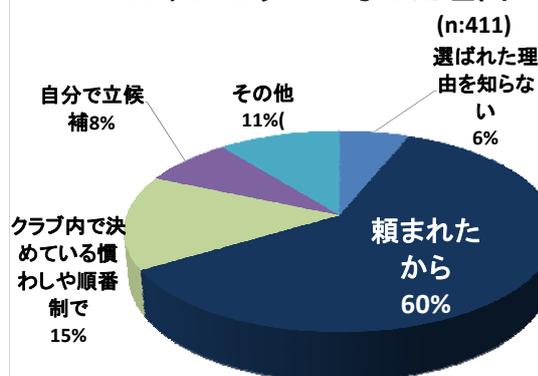
カウンセラーになった理由は、「頼まれたから」が60%、「クラブ内で決めている慣わしや順番で」が15%、「選ばれた理由を知らない」6%と、8割が会員の意志とは関係なく役割が決められている。

「立候補」は8%であるが、今後は、立候補するカウンセラーが増加することが望まれる。なお、立候補33名のうち、「初めてカウンセラーを体験する」が22名、「2名以上のカウンセラー体験者」が11名であった。今後は、立候補した理由が何かを聞いていく。

なお、「その他」が11%であるが、その内容は「クラブ米山奨学委員長だったから」、「女性同士だから」、「自分（カウンセラー）の自宅近くだから」、「（カウンセラーが勤務する）大学の生徒だから」や「趣味つながり、中国語が話せる」などで、選ばれた理由が明確であった。

「頼まれたから」や「慣わしや順番で」という回答が全体の75%を占めるが、カウンセラー終了時の感想では、全体の89%が「米山カウンセラーをして良かった」と回答している。

カウンセラーになった理由



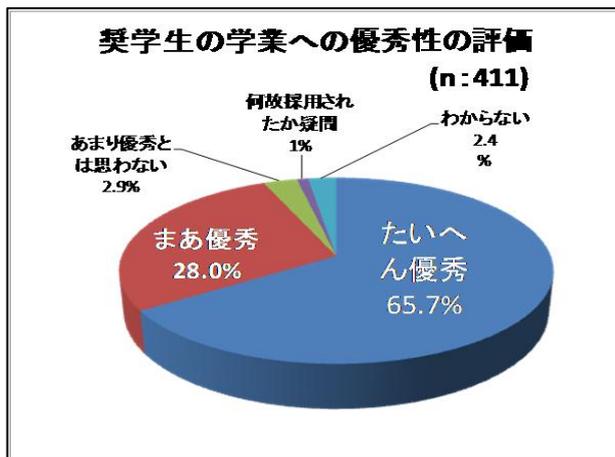
3. 奨学生の評価、および募集・選考システム、選考基準について

3 - 1

奨学生の学業への優秀性の評価

「たいへん優秀」が 65.7%、「まあ優秀」28.0%と、全体の 93.7 が優秀性への満足を示した。

「余り優秀とは思わない」2.9%、「何故採用されたか疑問」1%、「わからない」が 2.4%であった。



3 - 2

奨学生の募集システムについて

米山奨学生の募集は、現在、指定校・推薦制度で行なわれ、公募はしていない。また、かつて存在した「ロータリークラブ推薦制度」は、1998 年度募集から廃止されている。これは、「推薦をもらえば有利」との情報が流布し、選考の不公平感が生じ、募集時期にロータリアン探しに奔走するような学生が増えたためである。現在は 34 のロータリー地区別に選考委員会が組織され、各地区が決定する指定校から優秀な留学生を推薦してもらい、それらの候補者を地区のロータリアンが面接・選考するシステムとなっている。傾向として 3 人に 1 人が合格している。

米山奨学生の募集方法

- 現在、指定校・学校推薦制度で募集
- かつて、ロータリークラブ推薦が存在

↓

1998年度募集より公平・透明性の観点から廃止

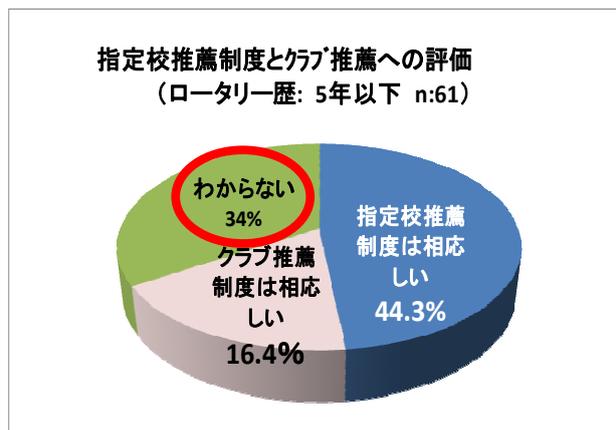
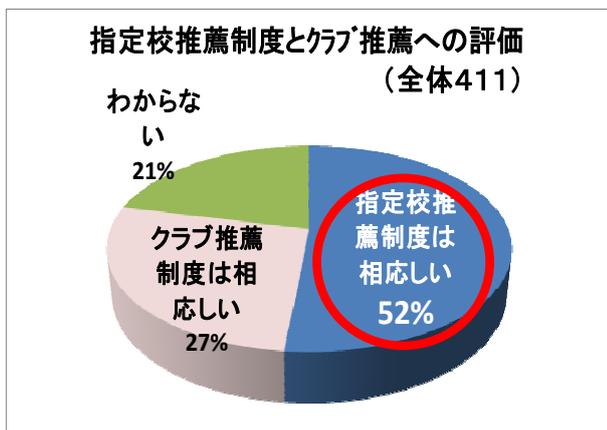
2つの募集方法 指定校・学校推薦制度 ロータリークラブ推薦制度について、カウンセラーの感想を聞いた。

多くが「指定校・推薦制度」を支持

「指定校・推薦制度は相応しい」が 52%、「クラブ推薦制度は(奨学生の募集として)相応しい」が 27%、「わからない」が 21%で、「指定校・推薦制度」への評価が高い。特長としては「ロータリー歴 5 年以下」で、「分からない」層が 34%と全体を上回っている。

【全体】半数以上が指定校・推薦制度を評価

【ロータリー歴 5 年以下】



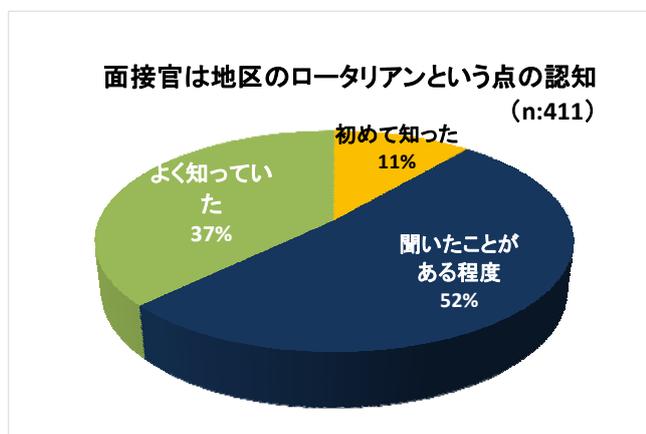
3 - 3

米山奨学生の面接選考は、各地区のロータリアンで組織された選考員会が担当している。このことを知っているか、を聞いた。

9割近くが「地区のロータリアンが面接官」となることを認知

「聞いたことがある程度」が52%で一番高く、「よく知っていた」37%、そして「初めて知った」11%と続く。

9割近くが、面接官が地区内のロータリアンであることを認識していた。今後は、聞いたことがあるだけでなく、どんな奨学生が選ばれているのか、「奨学生の選考基準は何か」への理解を深めてもらうことが必要となる。



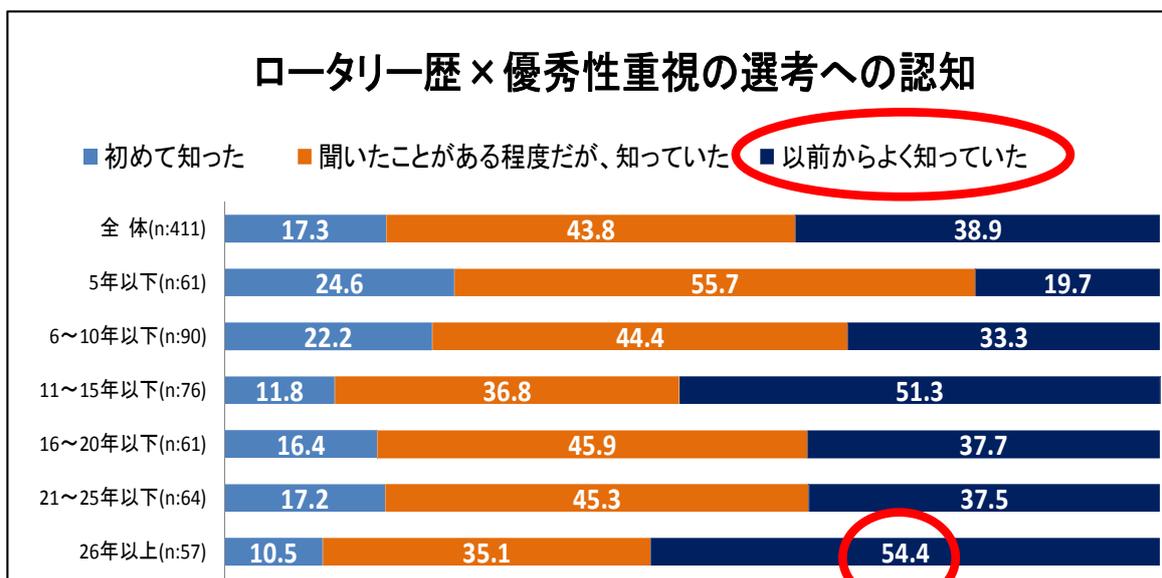
3 - 4

各地区で実施される奨学生の選考（書類選考・面接選考）は、一定の基準に沿って実施されている。

奨学生の面接の目的は、受験生の人間性や人格の優れた点を引き出しながら、「学業の優秀性」を見極め、「異文化を理解する柔軟性」や「コミュニケーション能力の高さ」を評価することとしている。つまり、米山奨学金は、経済的に困っているから支援するものではない。この点についての認識をカウンセラーに聞いた。

「聞いたことがある程度だが知っていた」が43.8%、続いて「よく知っていた」が38.9%、「初めて知った」が17.3%であった。

ロータリー会員歴別に見ると、26年以上の層が「よく知っていた」が54.4%と全体を上回っている。11年～15年以下の層は「よく知っていた」の数値が51.3%と突出している。この層は、「奨学金額の適正額」についても、現行の奨学金に対して支持が高いなど特長を持つ層である。



3 - 5

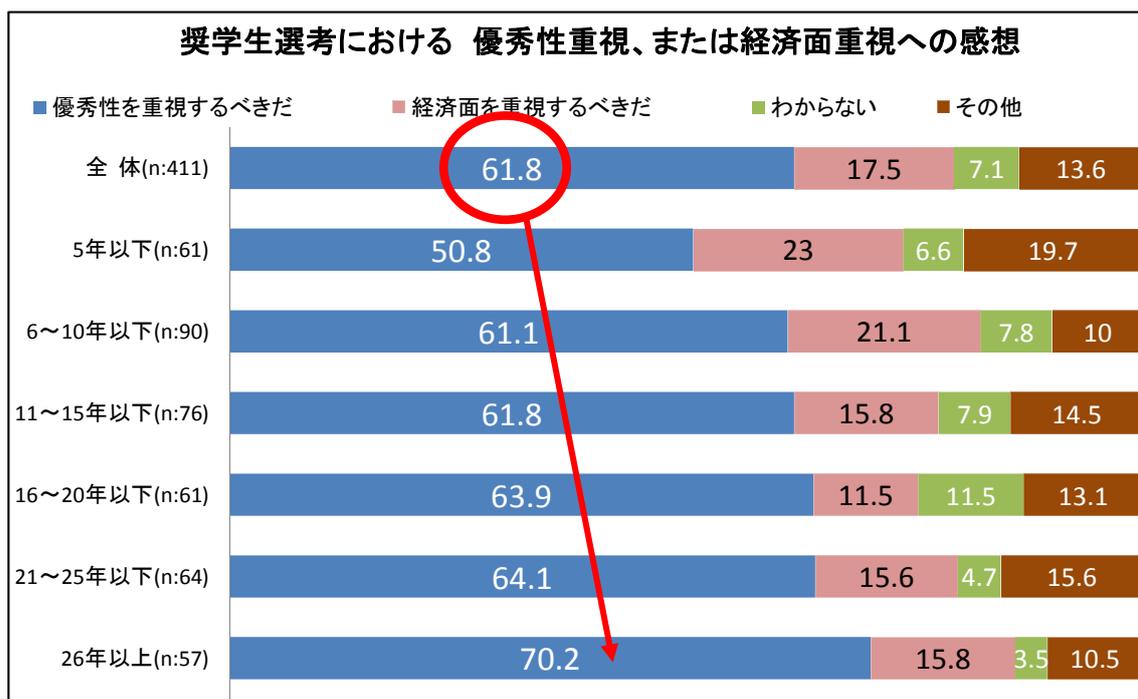
奨学生の選考基準は、「優秀性重視」か「経済面重視」かについて、カウンセラーの感想を聞いた。

全体の6割が「優秀性」を重視

「優秀性を重視」が61.8%を占め、「経済面を重視」が17.5%、「わからない」が7.1%で、「その他」が13.6%であった。

ロータリー歴が長いほど「優秀性」を重視し、短いほど「経済面」を重視する傾向が見て取れる。ロータリー歴5年以下の層は、「優秀性重視」が平均よりも低く50.8%で、「経済面を重視」が平均よりも高く23.0%だった。

「その他(56)」の記述回答を見ると、「優秀性と経済面と双方を重視したい」という意見が40件あった。経済的困窮を見極める方法として、申込書に記載された「収入・家賃・授業料」「家族構成」や面接時の服装などが想定されるが、これらの項目は真偽を見極めるのが困難であり、公平な評価がなされない可能性がある。



3 - 6

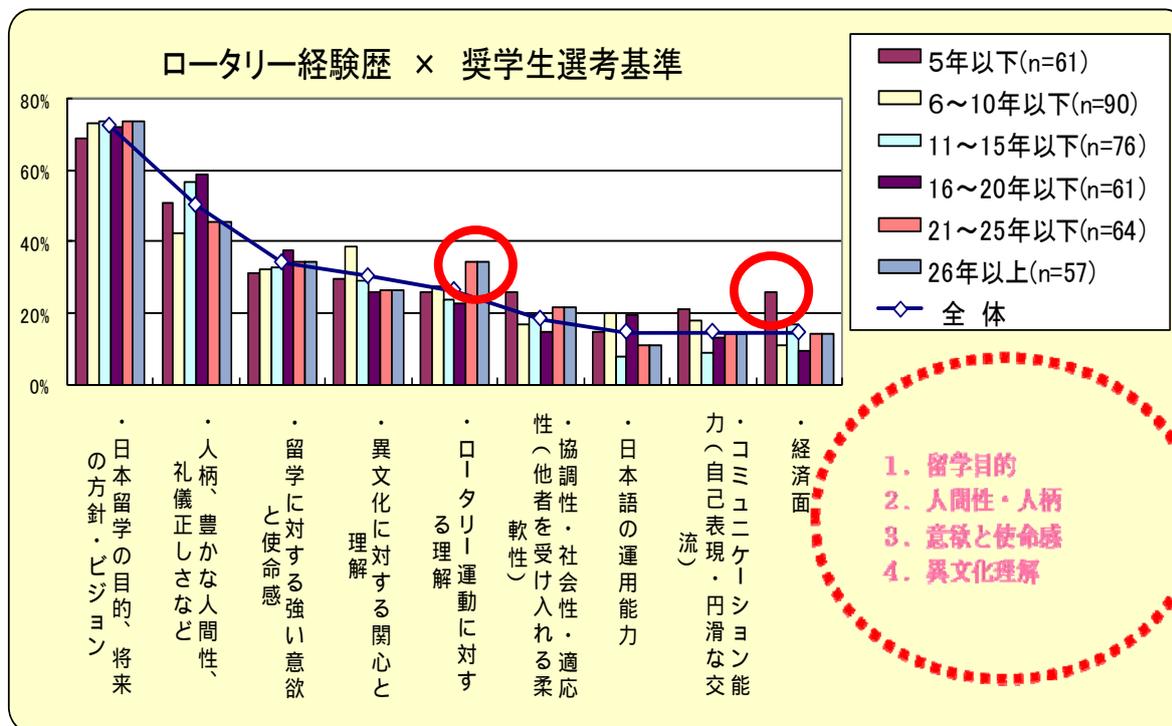
カウンセラーが考えた米山奨学生の選考基準

トップが「日本留学の目的、将来の方針、ビジョン」で、72.7%、2位が「人柄、豊かな人間性、礼儀正しさ」で50.4%、3位が「異文化理解に対する関心と理解」30.4%であった。「経済面」への支持は、14.6%と最下位であった。

奨学生を身近に感じているカウンセラーは、留学目的や将来性が明確で留学に対する強い使命感を持ち、豊かな人間性を兼ね備えた人物を評価している。

ロータリー歴別では、「ロータリー運動に対する理解」においてロータリー歴が長

い層(21~25年以下および26年以上)が他の層を抜いて高いのが特長である。ロータリー歴が長いことから、事業への理解を深く望む傾向が高いようだ。また、「経済面」において他の層を抜いて5年以下の層の数値が高い。事業への理解不足から同様の傾向が他の結果にも見られる。



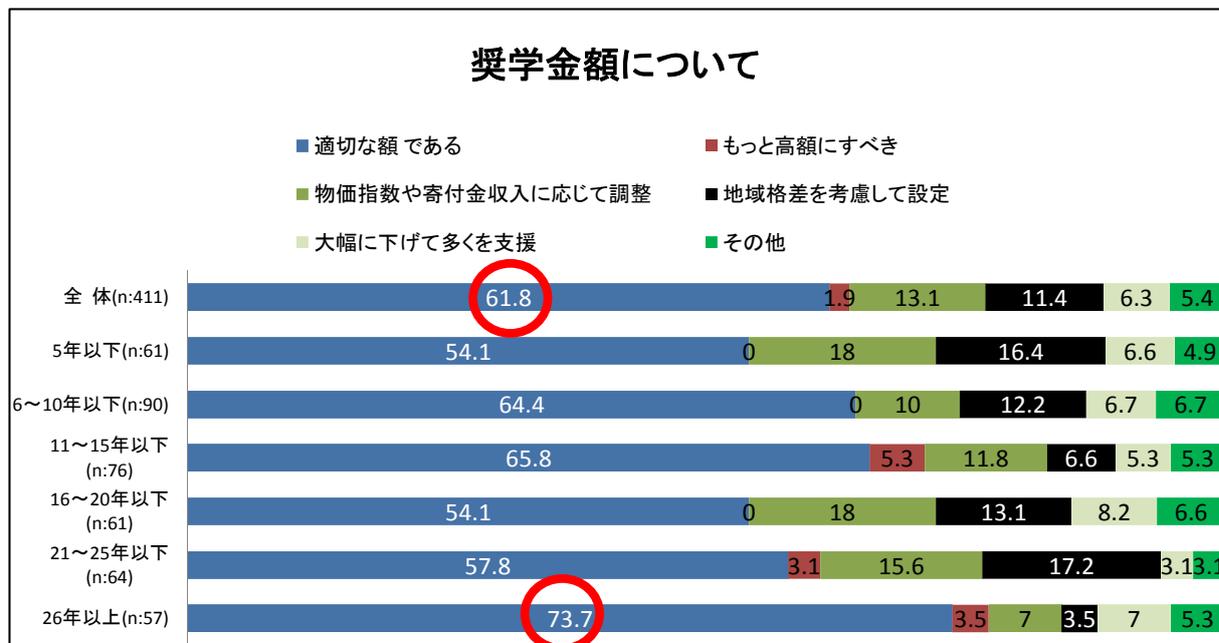
4. 奨学金額

現行の米山奨学金の種類は以下のとおりである。カウンセラーアンケートでは、当会の代表的な奨学金となっている修士課程、博士課程対象の月額奨学金額 14 万円について聞いた。

2011 学年度ロータリー米山奨学金		月額奨学金額	採用枠
1	学部課程	¥100,000-	795 名
2	修士課程	¥140,000-	
3	博士課程	¥140,000-	
4	地区奨励	¥70,000-	
5	海外応募者対象	研究生	¥100,000-
		学部生	¥100,000-
		大学院生	¥140,000-
6	クラブ支援	¥140,000-	3 名
7	海外校友会推薦	¥140,000-	
(8)	現地採用(新規採用無し)	¥70,000-	(継続者 2 名)
2012 学年度採用合計			800名

「適切な額」が 61.8%を占め、「もっと高額にすべきだ」が 1.9%、「物価指数や寄付金収入に応じて調整」が 13.1%、「地域格差を考慮して設定」が 11.4%、「大幅に下げて多くを支援」は 6.3%、「その他」が 5.4%であった。現行の奨学金額を適切とする数値は 6 割強と評価が高い。

ロータリー歴別では、「26年以上」の層が、「適切な額である」の数値が 73.7%と、全体の 61.8%を上回っている。



【現行の奨学金決定の経過】

現行の奨学金は、学部課程月額10万円、修士・博士課程月額 14 万円である。この金額は、2005 学年採用に改訂したものである。

それまでは、【学部課程月額 12 万円:修士・博士課程月額 15 万円】であり、これは、1990 年以来変更することなく 2004 学年度採用までこの額を維持してきた。しかし、寄付金収入が目標の 16 億を下回った結果を受けて協議した結果、2004 年 6 月に開催された理事会・評議員会にて、2005 年 4 月から大学院生を月額 14 万円に、学部生を月額 10 万円に減額することが決定された。

同時に、1,000 名の採用が 800 名に削減されるなど、寄付金収入に見合った採用数への是正が行われた。

なお、奨学金額の見直しは、第2期基礎調査にて行い、当時の奨学金額(学部生月額 12 万円:大学院月額 15 万円)について聞いた結果、「支持する」が 48.5%で、全体の半数が高額支援を評価した。この結果から、ある程度の金額が至当であるとした。

さらに、「私費外国人留学生生活実態調査」において、留学生の1カ月にかかる生活費全国平均が月額 14 万円と報告されている点から、大学院生の月額 14 万円:学部生月額 10 万円は適正であるとした。

「私費外国人留学生生活実態調査((独)日本学生支援機構(旧日本国際教育協会)編集 2002年3月発表)」

外国人留学生の学費を含む1カ月の地方別生活費(単位:円)			
北海道	122,000	東北	118,000
中部	124,000	近畿	136,000
九州	119,000	関東	154,000
東京	158,000	中国	124,000
四国	117,000		
全国平均	140,000		

財団法人日本国際教育協会「私費外国人留学生生活実態調査」(2002年3月)より抜粋

なお、2011年度現在、国費奨学金は学部課程：月額¥125,000-、修士課程：月額¥154,000-、博士課程：月額¥155,000-である。この他に授業料免除があり、年間1往復の母国-日本間の航空券が支給される。

5. 奨学生との交流

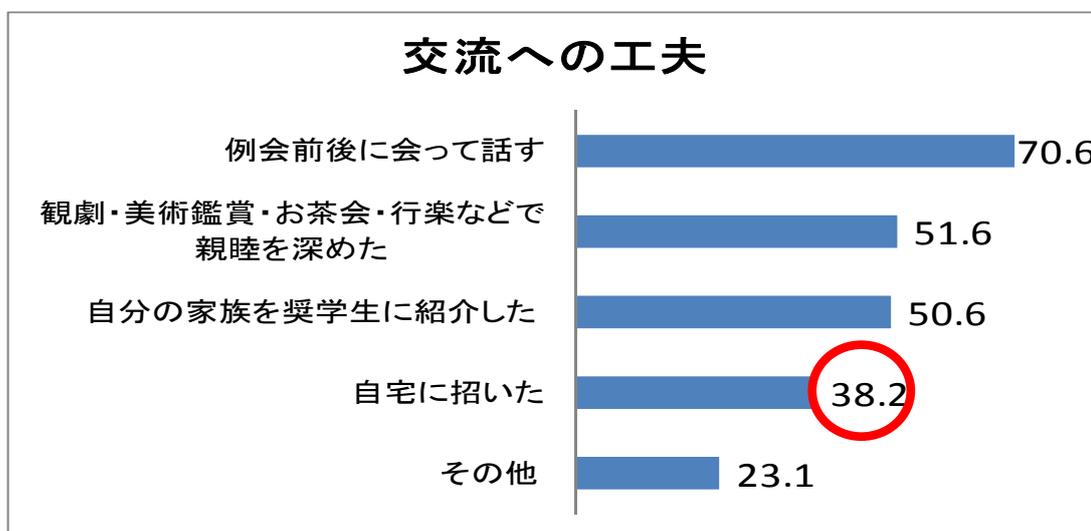
5 - 1

例会以外の交流方法 **意外に低い「自宅への招待」**

「例会前後に会って話す」がトップで70.6%、「観劇・美術鑑賞などに誘う」が51.6%、「自分の家族を奨学生に紹介した」が50.6%、「自宅に招いた」38.2%、「その他」が23.1%であった。「その他」の具体的内容を見ると、「旅行に誘った」や「初詣」の他、「母国語講習会の講師」「太極拳の講師」「お国自慢の料理づくり」等であった。奨学生がお客様ではなく、役割を持つことは望ましい。

「自宅に招いた」は半数に満たず38.2%と意外に低い。自宅への招待は義務ではないが、交流を深める近道である。例えば長年日本に暮らす留学生でも、日本人の自宅に招かれたことがないことが多いという。このような留学生が、カウンセラーから自宅に招待された場合、その喜びはことのほかであろう。

複数回答

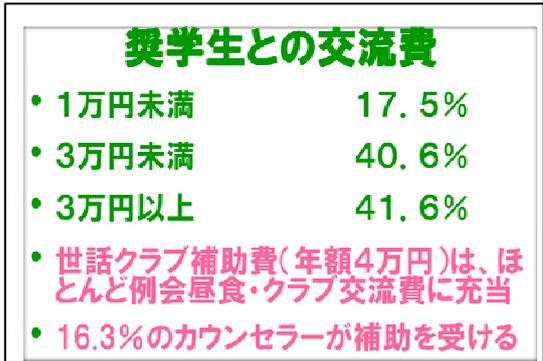


5 - 2

奨学生との交流費と世話クラブ補助費

交流費は、「1万円未満」17.5%、「1~3万円未満」40.6%、「年間3万円以上」が41.6%であった。

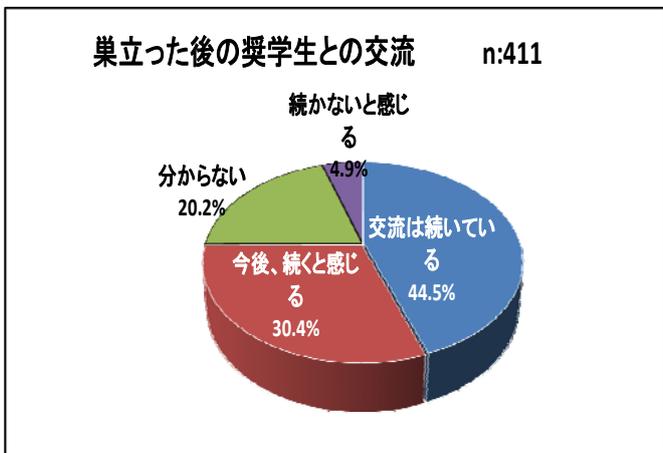
世話クラブ補助費として、毎年7月末に年額4万円が送金される。世話クラブ補助費の用途は、カウンセラーの交流費として使うことが可能だが、クラブからカウンセラーに補助されるケースは16.3%と低いことが分かった。世話クラブ補助費は主に、奨学生の例会出席の昼食代やクラブ企画の交流に使われるようだ。



5 - 3

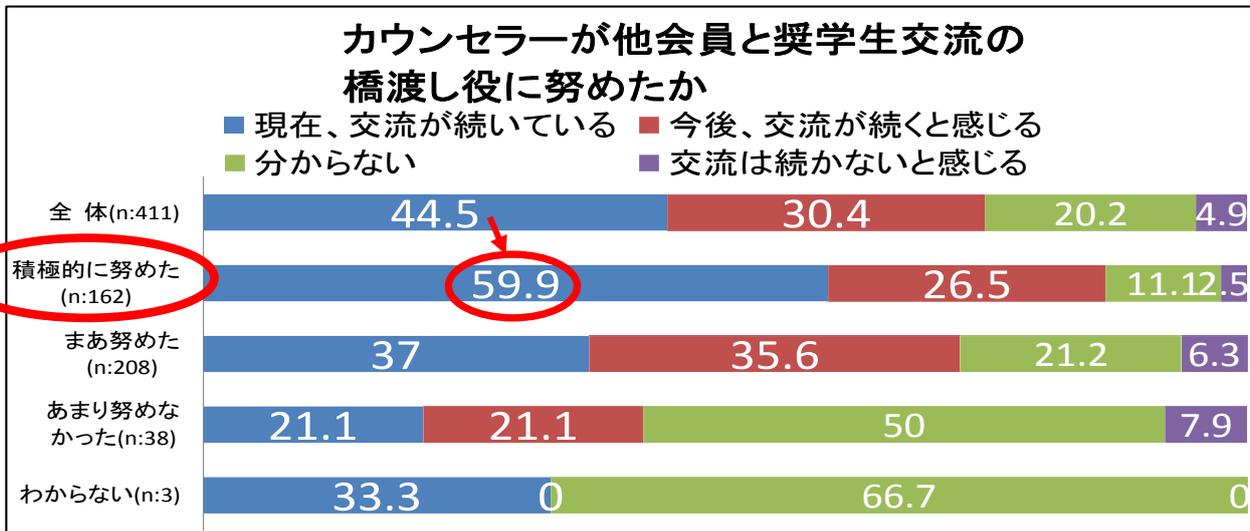
巣立った後の奨学生との交流

「交流が続いている」が44.5%、「今後、続くと感じる」が30.4%、この2つの合計は、74.9%。「分からない」が20.2%、「続かないと感じる」が4.9%であった。



これを、「カウンセラーが奨学生と

他の会員との橋渡し役をしたか」の度合いで見ると、次のグラフとなる。「橋渡し役として積極的に努めた」場合、「交流が続いている」数値は59.9%と全体(44.5%)を大きく上回った。また、「(橋渡し役など)あまり努めなかった」場合は、「交流が続いている」が21.1%、「交流が今後、続くと思う」22.1%と各々全体よりも低く、「分からない」が50%、「交流は続かないと感じる」が7.9%と各々全体を上回った。カウンセラーが努力しない結果の表れである。



奨学生が多くの会員との関わりがもてることは、世話クラブ全体で自分を受け入れてもらっているという実感が伴う。カウンセラーの工夫や配慮は重要である。

参 考 なぜ、消息不明が多くなってしまうのか・・・

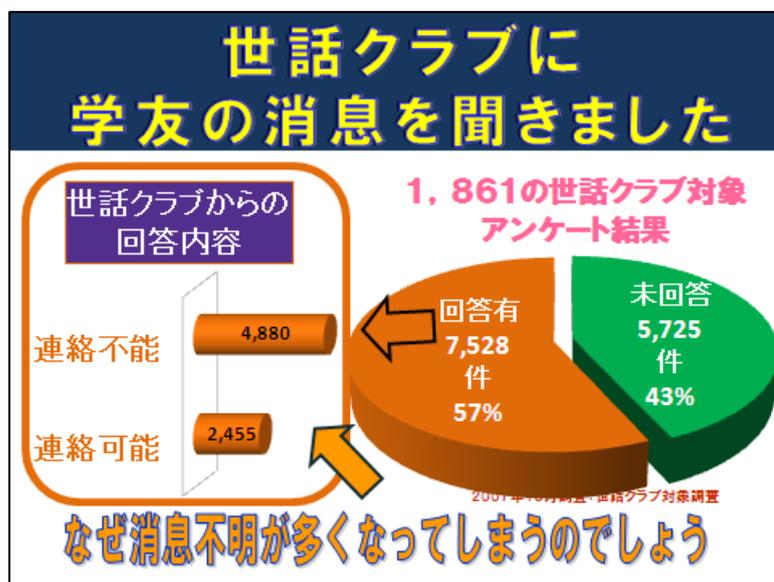
ここに、2007年10月から翌年5月にかけて、「世話経験のある1,861クラブを対象に実施した米山学友:13,092人の消息調査結果」を紹介する。対象となった世話経験クラブ1,861件のうち、回答があったのは68.9%（1,282クラブ）であった。残念ながら、3割(579)の世話経験クラブから、5,725人について協力を得られなかった。

米山学友13,092人でカウントすると、全体の57.5%（7,528件）について回答を得た。

回答のあった7,528件のうち、「学友との連絡が取れる」が2,455件（33%）、「学友と連絡が取れない」が4,880件（65%）と、「無回答」が193件であった。なぜ消息不明が多くなってしまうのか？

消息不明の理由で最も多いのが「カウンセラーが退会あるいは死去」で43%（2,084件）、次いで、「経緯が分からないが消息不明」が35%（1,720件）、「クラブから連絡したが、学友から連絡が来ない」が13.2%（644件）だった。

奨学生ケアは、カウンセラーに任せっきりにするケースが見られ、カウンセラーが特定された会員に任せられることが多いようだ。奨学生との交流のキーパーソンはカウンセラーであるが、カウンセラーだけでなく世話クラブ全体で奨学生を受け入れる体制を整えることが、問題への改善となる。



また、世話クラブ事務局スタッフの力が、奨学生との関係づくりの上で大きく影響する。世話クラブ事務局のスタッフが代わらない限り、クラブの窓口となってくれるからだ。

なお、米山奨学事業の醍醐味は、奨学生をどう育てたかにある。ロータリーの奉仕の心がどんな形で奨学生の人生に反映されたかである。東日本大地震後、日を

置かずに多くの国内外の学友や学友会が募金活動を行い総額 740 万円もの義捐金が当会に送られたこと。有志を募って被災地に炊き出しのボランティアに出かけた米山学友たち。ロータリーに接し学んだ奉仕の心が、彼らの生き方に反映している。

中国学友会初代会長の姫軍さんは「ロータリーは経済的支援を与えてくれただけでなく、生き方“価値観”を教えてくれた」と語り、後輩となる米山奨学生のための資金にあててほしいと、毎年、中国から 50 万円の寄付を続け累計 270 万円 (2011 年 8 月現在)の寄付実績を記録している。

巣立った後の交流が続くかどうかは、奨学生時代や巣立った後に培われた関係づくりにかかってくる。消息が不明になるのは、奨学生側が悪いと一方的に決めつけず、奨学期間中にどんなことをが奨学生に伝えてきたか、そして巣立った後の接点の作り方も重要である。

6. 奨学生の例会出席

「100%出席」が 76.2%、「欠席が 1～2 回」20.2%、「欠席が 3 回以上」3.4%であった。

米山奨学生の義務は、「毎月 1 回、例会に出席する」としている。第一週の例会参加が無理であれば、第二週という具合に他の週に参加する機会はある。

こうした工夫を鑑みると、出席率はもっと高い数値であるべきである。

また、例会参加は毎月 1 回が奨学生の義務で、確約書を交わしている。毎月複数回、例会に出席しているケースを聞いてみた。

毎月 1 回参加は、68.4%、奨学生の都合に合わせて数回出席が 30.4%、毎週出席が 1% (4 件)であった。

博士課程では、論文にむけて時間のやりくりが困難な場合が多い。研究を犠牲にしてまでの例会出席の奨励はしない。事情が許し、お客様としてではなく、意欲があって、例会運営を手伝えるような奨学生であれば、毎週例会に参加することは望ましい。

奨学生の年間例会出席率

- 100%出席……………76.2%
- 1回～2回欠席……………20.2%
- 3回以上の欠席……………3.4%

例会参加のペース

- 確約書どおりに毎月1回 68.4%
- 毎月1回その他、都合に合わせてその他の週も出席 30.4%
- 意欲に合わせて毎週出席 1% (4件)

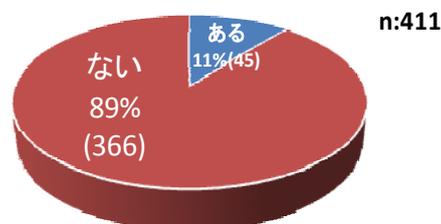
7. 奨学生の負担

カウンセラーからみて、奨学生が負担に感じていることがあるかを聞いた。

「奨学生が負担となっていると感じない」が 89%、「負担となっていると感じる」が 11%であった。記述回答では、「例会出席のために授業が犠牲になる」が 40 件と多く、「例会場が遠く往復 4 時間かかる」「クラブの方針で毎週例会に出席させているため」などであった。

また、奨学生は毎月 1 回、例会に出席することを義務としている。奨学生の事情に配慮すること無く、「クラブの方針で毎週例会に出席させている」ようであれば、改善が必要である。

例会参加が奨学生の負担となっていると、
カウンセラーとして感じることはあるか



カウンセラーが感じる

奨学生の負担とは・・・

- 例会出席のために授業が犠牲になる
- 例会場が遠く往復 4 時間かかる
- クラブの方針で毎週例会に出席

8. 指導教員との連絡（複数回答）

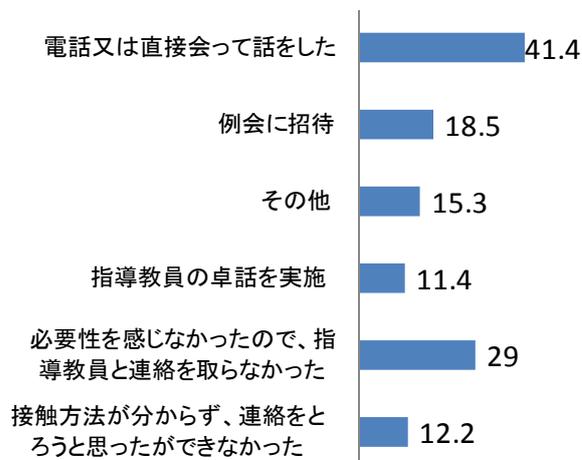
「電話、または会って話をした」41.4%、「例会に招待した」が 18.5%、「その他」が 15.3%、「指導教員の卓話を実施した」が 11.4%であった。「その他」の記述回答は、「指導教員が忙しく実現できなかった」などである。

一方、「必要性を感じなかったので指導教員との連絡を取らなかった」が 29.0%、「接触する方法がわからず連絡できなかった」が 12.2%であるが、これらは大きな課題である。

仮に、指導教員の米山奨学事業に

対する関心が薄いのであれば、地区における米山奨学事業の活動の中で、大学担当者および指導教員との交流への工夫が必要であろう。一部の地区では、地区内所在大学や指定校の担当者を対象とした「大学説明会や懇談会」を実施している。他に、指導

指導教員との連絡



教員・奨学生・カウンセラーを対象とした「三者懇談会」を実施する地区の事例を含め、対策を考える必要がある。

9. カウンセラーとして困ったこと

「カウンセラーとして困ったことがある」と回答したのは、全体の 13.1% (54 件) であった。

奨学生の悩みに対する米山カウンセラーの対応は、カウンセラーハンドブックに記載しているとおり、あくまでも奨学生の自立を促し、相手を尊重し、カウンセラーの尺度で判断しないことが原則。

奨学生の悩みを受容（聞き、受入れ）し、「貴方がそう感じたのは、どういうことからなのか?」、「そう言われてどう感じたのか?」、「その様に貴方が感じたのだから苦しいよね・・・」等、奨学生を全面的に受け入れることがポイントとなる。相手の気持の整理をできるようにして、適切な情報を提供し、解決の糸口を見つけられるようにすることが大切である。あくまでも、悩みを解決するのは自分自身であり、悩んで検討した結果を本人に選択させるようにすることが重要である。

カウンセリングの技法

カウンセリング技法（カウンセラーHB 参照）

1. 自立を促す(判断を押し付けない)
2. 相手の立場を尊重する
3. 自分の尺度で判断しない
4. 守備範囲を超える問題は専門家へ

相談に対してNOと言わねばならない時

1. 曖昧な言い方はしない
2. 理由を説明する
3. 率直に NOという、勇気を!

なお、心の悩みなど守備範囲を超える内容となったら、専門家に任せるべきである。

なお、カウンセラーとして困った中で、「博士課程留年」などは、話を受けとめてあげることで奨学生の心の整理になる。時には、指導教員が自分に差別をしているようだと言うケースもある。しかしながら、大学側（教授）にかけ合って、なんとかしてあげよう思うことは不要。なぜならば、我が子のことで大学教授にかけ合うようなことはしないからである。

また、連帯保証人の依頼への対応は、カウンセラーの考えを率直に伝えることに限る。例えば、「奨学生からアパートの連帯保証人になってほしい」と相談された場合、米山

カウンセラーとして困ったこと

Yes= 13.1% (54)

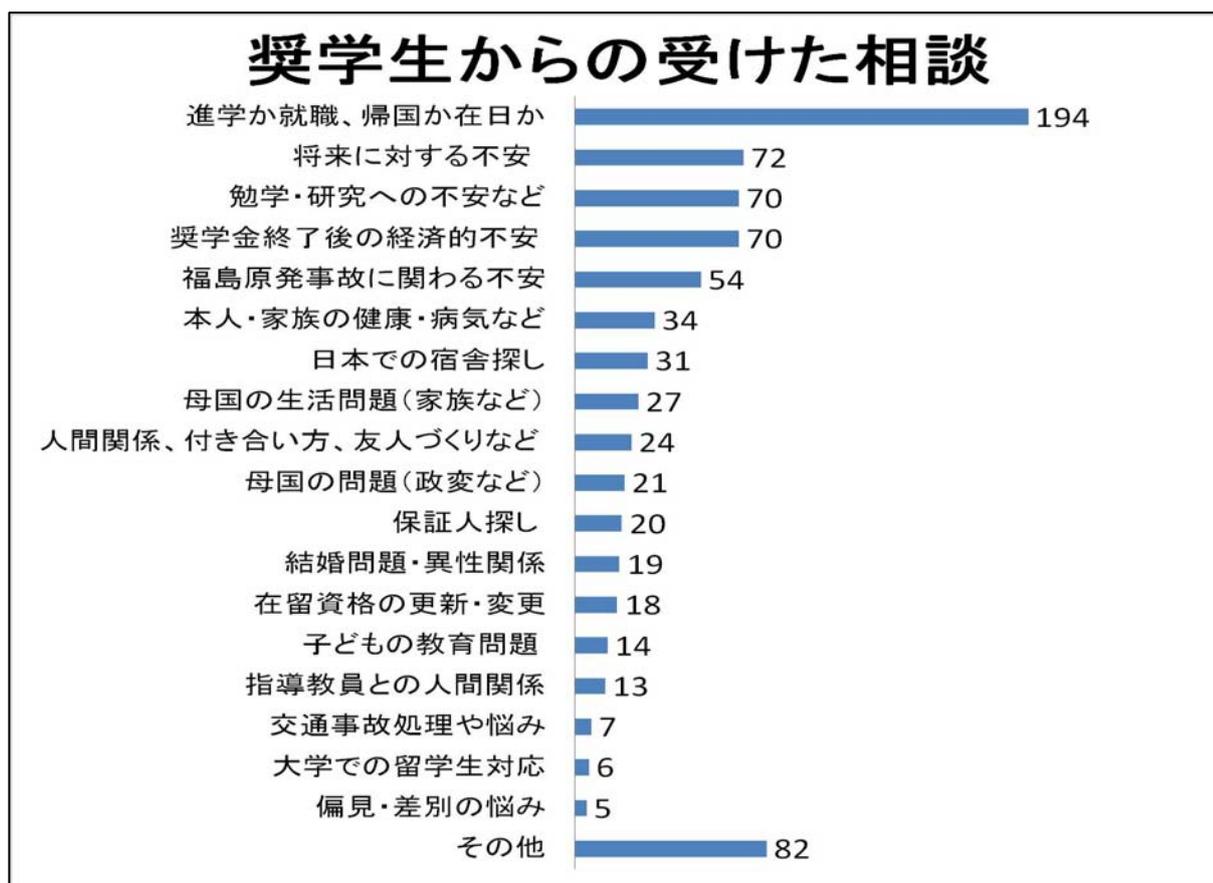
- 博士課程留年(バーンアウト症候群)
- アパートの連帯保証人依頼の対応
- クラブ会員の奨学生への批判
- 地区から奨学生への行事出席要請

奨学会としては引き受けることを奨励はしていない。ただし、カウンセラー個人として、奨学生が信頼できる相手となっている際は、保証人となることは妨げない。なお、断ることが悪いと思う必要は無く、断りきれずに、曖昧にしてズルズルと回答を延ばすことは避けたい。ノーと言える、カウンセラーになることも、時には必要である。

「クラブ会員の奨学生への批判」が実際にあった際、カウンセラーとしては困惑するだろう。ただし、批判の的が何か、誤解によるものか、を把握しカウンセラーの判断で補うことが可能である。例えば、クラブ会員が「経済的に困っている留学生を支援したいのに、世話している米山奨学生は困っているように見えない」という指摘があった場合、米山奨学生の選考基準は経済面ではなく優秀性が重視されていることをクラブ会員に伝え、理解してもらうことが必要である。仮に、カウンセラーがその事を伝えきれないようであれば、地区米山委員会に相談するなりして、正しい理解につなげることが重要である。

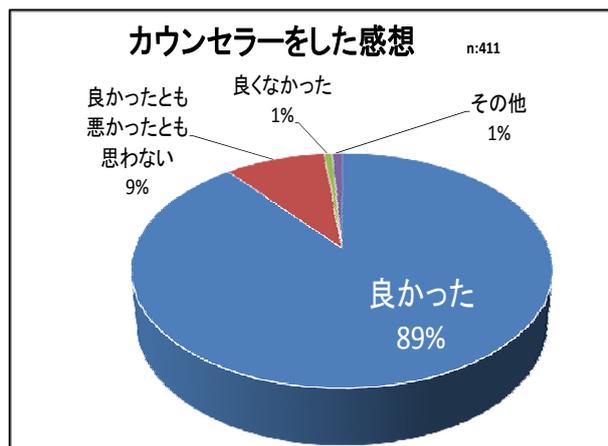
また、「地区から奨学生に対する数多くの行事出席要請」が、奨学生にとって負担になっているとしたら、地区米山奨学委員会に奨学生の卒論や研究の状況を伝えるなどすることも重要である。地区米山奨学委員を含め、複数のロータリアンが奨学生の事情を共有し、事態が奨学生にとって負担となっていることか、改善が可能かなど、話し合うことが地区米山奨学委員会の出席要請への見直しに繋がる。

10. カウンセラーをした感想



「良かった」が 89%、「良かったとも悪かったとも思わない」が 9%、「良くなかった」は 1%、「その他」が 1%であった。

良かったことの記述回答は、「国家間に問題が生じた場合でも、その国の友人がいると感じ、今までと異なる理解をするようになった」「研究に向ける彼らの真摯な姿勢、次の世代を築いてくれる彼らへの応援ができることに満足」「寄付が無駄になっていないと感じた」、「米山奨学事業の意義、やり甲斐を実感できた」、「日本に居ながら国際交流が身近にできた」などである。



「良かったとも、悪かったとも思わない」における記述回答では、「私（カウンセラー）が交流のための時間を作れば良かった」や「関わりをもっと作れば良かったと責任を感じる」などの感想があった。また、「相談ごと無く、優秀で問題のない学生だったから」や、「やれるだけのことはしたが心残りを感じる」などは、カウンセラーとしての手応えや、達成感が得られないということらしい。

他に「奨学生の選考に疑問をもった」という記述もあったが、今後、地区選考委員会から世話クラブ・カウンセラーに対して“どんな奨学生を採用したか”という地区の選考方針を伝えることが重要だ。どんな基準で米山奨学生を選考しているのか、例えば、漢字圏外の留学生を採用した経緯や、少々日本語での交流が困難ではあるが研究内容に魅力があり奨学生の将来像にも期待が向けられるなど、選考事情を伝えることも必要である。特に、米山奨学生の選考は、「経済的に困っているから選考されるのでは無い」点は基本である。世話クラブ・カウンセラーに対して、選考方針や基準を分かりやすく伝えることは、この事業への理解に繋がる。「何故、こんな学生が採用されたのかわからない」という疑問は無くなるだろう。

11. まとめ

今回の調査、および過去の奨学生対象の調査から、以下の点が米山カウンセラーに求められる。

まず、どんな選出方法であってもカウンセラーになった以上、「米山カウンセラーを楽しむことだ」。同時に、記述回答で多く見られた反省とも言えるカウンセラーの言葉が「(奨学生に)時間をもっと使うべきだった」であることに注目したい。

また、「相手が望まないことはしない」という点に注意したい。これはハラスメントへの認識である。同じ行為をしたとしても、人によって感じ方は異なる

●望まれること

1. 奨学生に対応する時間を持てる方
2. 奨学生に対する思いやりを持てる方
3. 異文化理解・国際交流に関心がある方
4. カウンセラーの役割を楽しめる方

▲注意してほしいこと

1. 相手が望まないことはしない！！
●カラオケで歌う ●身体的接触
●着物や浴衣を無理矢理着せる
2. “自宅に遊びにいらっしやい！”と行ったら、必ず呼ぶ
3. 曖昧な返事はしない。Noと言えるカウンセラー

る。相手が不快に感じた場合、それはハラスメントとなる。無理矢理カラオケで一緒に歌おうとしたり、肩や腕を組んで馴染もうとしても逆効果。よかれと思って浴衣に着替えてもらう事が、本人にとっては苦痛な場合もある。例えば、男性会員ばかりの提案で浴衣を着せられた、と奨学生が感じた場合、これは立派なハラスメントになりうる。こうした誤解を防ぐには、会員の家族、奨学生が女性の場合は奥様の介入が大きな助けとなる。

なお、カウンセラーにして欲しいことは、「奨学生と会員との交流の橋渡しをすること」である。その後の交流により効果を生むことが、今回の調査でわかった。橋渡し役をすることが、世話クラブ全体で奨学生を受け入れるムードづくりに繋がる。

◎してほしいこと

1. 他会員との交流の橋渡し役
2. 経済的に困っているから米山奨学生になったのではない点を広報
3. 自宅に招く(義務ではないが)
4. 指導教員との接点を持つ

また、米山奨学生の選考基準として「米山奨学生は経済的に困っているから採用されるものではなく、奨学生の優秀性と研究を通じた将来への期待」を重視していることを会員に伝え、米山奨学事業の正しい理解に繋げてほしい。

そして、日本人にありがちな「今度、家に遊びにいらっしやい」という挨拶。言ったからには、必ず家に誘ってほしい。いつまでたっても、誘われないために、自分がカウンセラーに対して何か悪いことをしたのではないかと要らぬ心配をしてしまう奨学生がいる。義務では無いが、できれば奨学生を自宅に招いてもらいたい。

“どんな奨学生を採用したかで奨学事業の価値が決まる。”そして、“米山奨学事業は、どんな奨学生に育てくれたか、そして育てたかが醍醐味となる”。その案内役は、カウンセラーや奨学生を取り巻くロータリアンにかかっている。

おわり